

促成イチゴにおけるクルミネグサレセンチュウの発生状況

脇部秀彦・鬼塚朔郎・*石橋泰之 (佐賀県畑作試験場・*佐賀北部農業改良普及所)

Hidehiko WAKIBE, Sakuro ONITSUKA and Yasuyuki ISHIBASHI : Occurrence of *Pratylenchus vulnus* Infesting Strawberry plants in Saga Prefecture

佐賀県下の促成イチゴでは、1983年ころより株が萎縮し、下位葉の葉辺から枯れこみ、やがて枯死する症状が激増してきた。筆者らは、県下各地で本症の発生状況を調査し、クルミネグサレセンチュウの検定および栽培品種、連作年数および育苗方法等との関係について検討したので、その概要を報告する。報告にあたり、貴重な助言をいただいた佐賀大学農学部近藤栄造教官、佐賀県農業専門技術員室阿部恭洋氏、並びに本調査に御協力いただいた佐賀県植物病害虫防除所はじめ関係普及所および農協の各位に深謝の意を表する。

1. 試験方法

発生実態調査 1985年3月上旬～5月中旬にかけて、県下14市町村のハウスイチゴ圃場で本症の発生実態を調査した。本症の見られた圃場から、発症株を根辺土壌(約1 l)とともに2～3株ずつ採取し、これらから1株当たり約500gの土壌をとり、篩別法と2層遠心浮遊法を組合せて線虫類を検出した。

聞き取り調査 本症が発生した圃場の栽培品種、連作年数および育苗方法について、アンケート方式で聞き取り調査を行った。

2. 結果および考察

1) 発生実態 本症は調査を行ったすべての地域で見られ、確認した発生圃場数は155点であった。このことから、本県では広域的に発生していることが伺われた。一方、検定した土壌からクルミネグサレセンチュウが検出された圃場数は111点(71.6%)に達し、本症の発生に本虫が大きく関与していることが判明した。

2) 連作年数との関係 連作年数について調査を行った地域の発生状況を第1表に示した。本症は、連作年数が1～3年の圃場においても、4～6年および7年以上の圃場とほぼ同様に発生しており、またネグサレセンチュウの検出結果についても連作年数の増加に伴って多くなるという傾向は認められなかった。

3) 育苗方法との関係 県下における育苗方法は、地床育苗とポット育苗があり、両者を併用している農家もかなりみられた。近年、ポット育苗が急増し、調査時では約5割を占めていた。育苗法別に発生状況を第2表で示した。ポット育苗では、親株から出たランナーを直接ポットに誘引するため、従来は本虫の発生が非常に少なかったが、本調査では地床育苗より少ないものの、かなりの発生が確認された。

4) 栽培品種との関係 本県の品種別作付面積は1982～1984年にかけて急激に変化した。すなわち、'82年は全

作付面積の11%だった、“とよのか”、“はるよい”の新品種が、'84年には85%を占め、“春の香”は80%から4%に減少しており、わずか2年で品種が更新されている。品種別の発生状況を第3表に示した。発生地栽培品種は、“とよのか”と“はるよい”が全体の92%で、更新したこれらの品種に発生が多かった。

以上のことから、1984年に県下の広域にわたって急激に発生した本症は、クルミネグサレセンチュウが関与するイチゴ根腐萎ちょう症¹⁾と思われた。本症の発生に、連作年数や育苗方法との関係は認められず、早急に行われた品種の更新が関与していることが判明した。すなわち、本症の発生は、多量の株・苗の産地間移動に伴う汚染土壌の持ち込みが原因と考える。このような株・苗で導入する作物では、土壌病害虫の検定および導入時における防除方法の検討が必要であることを示唆するものと思われる。

第1表 発生の連作年数と発生状況

連 作 年 数		
1～3年	4～6年	7年以上
23 (36)	33 (45)	25 (36)

第2表 発生の育苗方法と発生状況

育 苗 方 法		
ポット	地床	ポット+地床
14 (26)	22 (27)	13 (15)

第3表 発生の栽培品種と発生状況

品 種 名				
とよのか	はるよい	宝交早生	麗紅	春の香
29 (42)	73 (95)	5 (12)	2 (3)	2 (3)

注) 第1, 2, 3表の数値は、クルミネグサレセンチュウが検出された圃場数で、()内は、イチゴに生育障害や枯死がみられ、土壌の採取を行った圃場数。

引用文献

- 1) 新須利則・小川義雄・樋口泰三：九病虫研会報 23, 43-47, 1977.